

独学、発光、友情、ケア、毒。
この五つの言葉は何を意味するの？

これは7月17日にオープンしたヨコハマトリエンナーレ2020「AFTERGLOW—光の破片をつかまえる」を構成する5つのコンセプトである。インド人の芸術監督トリオ「ラクス・メディア・コレクティブ」の意欲的なテーマ設定だ。

新型コロナウイルスの感染者数がじわじわと上昇に転じ、第二波の到来がささやかれるときに、なぜ実施に踏み切ったのか。

それは過去の危機同様、「不要不急」として真っ先に自粛の対象に挙げられ、社会による支

新美術
時評

近藤誠一

をいまでも高めていくと誰もが

が確信していた。しかし目に見えぬウイルスの爆発的感染拡大は、ひとつひとつの間の物理的距離をおくという、最も原始的な方法によってしか阻止できぬという現実がさらけ出された。加えて世界に広がった危機感は一

復機能である。

資源の乱開発や工業活動の制限、プラスチックなど物質循環に馴染まない物質の製造を停止することで、生態系への過度な負荷を軽減しながら文明の発達を確保するという知恵を見出さなければならぬ。「ウィズコロナ」とは、そのために文明の利便さの追求を抑制し、都合の悪いもの（書虫や病原菌）とも共存していく知恵のことである。

しかしこれは経済成長を至上命令とする資本主義経済や、権力の維持が最優先の政治が支配するいまの社会での実現が難しいことは各国の状況が示している。それができるのは市民の行

「新常態」と横浜トリエンナーレ

援が後回しにされる中、文化芸術がもつ本来の力と社会的価値を日本から世界に示す絶好の機会であるという確信があったからだ。

コロナと共存しながら、感染抑止と経済社会活動の維持を両立させる「新常態」が語られるが、誰もその設計図を描くことができない中で、芸術こそがその答えのヒントを提示できるという信念がそこにある。

今回の危機は、文明と自然の関係についてじっくり考える機会を与えてくれた。文明は人間の賢さの象徴であり、科学技術力は自然を制御してすべての難問を解決し、AIは人類の地位

類を団結・協力させることが、国家間の対立、社会の分断、民族間の差別を助長し、人間の非文明的な醜い側面を露わにした。

科学の力をもってしても、生態系の摂理に真っ向から逆らって存在することはできないという事実を思い知らされた。ウイルスは地球上の生命の維持と進化に重要な役割を果たしている。食物連鎖を構成する捕食者と被食者の人口の微妙なバランス維持にも関係する。感染症ウイルスの活動拡大は、生態系のバランスを崩す人類の人口爆発への当然の反応である。森林破壊や多くの種の絶滅を招いた人類に対する自動的なバランス回

動変容であり、それをリードするのは支配や富から自由で、自然を崇め、長期的視野で人間の幸せを求める文化芸術だ。

トリエンナーレにおける参加アーティストの自由な表現は、ひとりのひとりが「新常態」とは何かを考え、行動していく上で重要なインスピレーションを与えてくれるに違いない。冒頭の5つのキーワード、取り分け最後の「毒」は、人間にとって都合の悪いものといかして賢く共存できるかを考えさせてくれる。できるだけ多くの方々に来場して頂きたい。

（近藤文化・外交研究所代表／横浜トリエンナーレ組織委員会委員長）